

【vol.43】インターバルからの逆算 ～その1～

こんにちは、大沼です。

ここ最近、ダイアトニックコードのそれぞれの役割や、コード進行の鉄板の形(終止形、ケーデンス)、サークル・オブ・フィフスなど、楽曲のコード進行に関する知識を学んできましたね。

今回は、それらの知識を実戦形式で使う訓練をしてみましょう。

何をやるのかと言うと、タイトルにもある通り、“インターバルからの逆算”です。

要するに、楽曲のコード進行の度数(インターバル)がわかっている場合、そこに、とある key を設定すると、そのコード進行は実際にはどうなるのか？と、言うことを導き出す訓練です。

このスキルは特に、自分のオリジナル曲を作る時や、何か曲を弾いたり歌ったりしていて、今の key が合わない時、移調する(key をずらす)時などに使えるものです。

まあ、実際の所、全てのスキルと知識は大本で繋がっているのもので、何をするときにも使えるんですが。

この講座をずっと受けているあなたならば、今回の内容をやってみれば、感覚が掴めると思います。

では、始めていきましょう。

今回分析するコード進行は3つです。

さっそく見ていきましょう。

譜例 1

Example 1 shows two systems of guitar staves. The first system has a treble clef staff with a treble clef and a TAB staff. The second system has a treble clef staff with a treble clef and a TAB staff. The chord symbols are: I, VIIm, V, IV, IVsus4, I.

譜例 2

Example 2 shows two systems of guitar staves. The first system has a treble clef staff with a treble clef and a TAB staff. The second system has a treble clef staff with a treble clef and a TAB staff. The chord symbols are: VIIm, IV, VIIm, IV, VIIm, IV, II7, IV.

譜例 3

Example 3 shows two systems of guitar staves. The first system has a treble clef staff with a treble clef and a TAB staff. The second system has a treble clef staff with a treble clef and a TAB staff. The chord symbols are: I, bVII/I, IV, I, I, bVII/I, IV.

これらの 8 小節×3 パターン、計 24 小節を分析していきます。

インターバルを見てみると、ダイアトニックコードに含まれていないものもありますが、そういった場合は、インターバルのローマ数字に、忠実に音を合わせればOKです。
(※その辺りは後で解説します)

で、設定するkeyなのですが、まずはお馴染みのkey=Cでいきましょう。

この、keyが決まった時点で、上の譜面を見ながらある程度弾ける人もいますが、そうではない場合、以下のような順番で作業してみましょう。

- 1、そのkeyの基準となるダイアトニックスケールを全て導き出す。
- 2、keyと、そのkeyの基準となるスケールから導きだされる、ダイアトニックコードを把握する。
- 3、ダイアトニックスケールの構成音と、ダイアトニックコードをインターバル的に見た場合、どれが何度のものであるのかを把握する。
- 4、上の譜面のインターバルに当てはめる

と、こういう順番です。

コードを当てはめたら、普通に譜面の通りに弾いてみます。
この時、弾き方は何でも良くて、適当なコードストロークで十分です。

この訓練そのものは、テクニックを鍛える為のものではなく、
これまで覚えた知識と、実際のギタープレイの擦り合わせで、
後は、それらを耳で確認するのが目的です。

なので、スムーズに弾けるようになるのは後回しで良いので、

- ・今、鳴らしているコードが、keyに対して何度に当たるダイアトニックコードなのか？
- ・そして、そのコード進行の響きはどんな感じなのか？

これらを意識して、取り組んでみてください。

では、次のページから解説に入っていきますが、まずは力試し、ということで、
自力でやってみましょう。

さて、どんな感じでしょうか？順を追って見ていきましょう。

まず、key=C時の基準スケールはCメジャースケールで、
構成音はC、D、E、F、G、A、Bの7音、それをインターバル的に見るとこうでしたね。

- I、C**
- II、D**
- III、E**
- IV、F**
- V、G**
- VI、A**
- VII、B**

そして、C メジャースケールの構成音から導きだされるダイアトニックコードは以下ですね。

I、C (CM7)
II、Dm (Dm7)
III、Em (Em7)
IV、F (FM7)
V、G (G7)
VI、Am (Am7)
VII、Bm(♭5) (Bm7(♭5))

と、ここまでの、ダイアトニックスケールとダイアトニックコードの両者を導き出したところで準備が完了します。

そうしたら、譜面に書いてあるローマ数字のインターバルに、各コードを合わせていきます。

譜例 1 からいきましょう。まず最初の 3 小節は I (1 度) のコードですね。key=C 時の I のコードは「C」なので、3 小節 C コードが続く事になります。

4 小節目は VI m(シックスマイナー) のコードなので、6 度に対応するコード、「Am」がきますね。

次の 5～8 小節目の進行は、

V→IV→IV sus4 → I

となっており、これを key=C のダイアトニックコードに当てはめると、

G→F→Fsus4→C

という進行になります。

Fsus4 は、純粋なコードの構造的にはダイアトニックコードから外れますが、今は、とりあえず気にしなくて良いです。

ここまでをまとめると、譜例 1 は key=C の場合、このような進行になりますね。

譜例 1、key=C の場合

Example 1 musical notation in C major. The first system shows chords C and Am. The second system shows chords G, F, Fsus4, and C.

続いて譜例 2 にいきましょう。譜例 2 は合計 3 つのコードが出てきます。

・1～4 小節目のインターバルは、**VI m→IV→VI m→IV**

・5～8 小節目のインターバルは、**VI m→IV→II 7→IV**

なので、これに key=C のダイアトニックコードを当てはめると、

Am→F→Am→F

Am→F→D7→F

と、このような進行になりますね。

譜例 2、key=C の場合

Example 2 musical notation in C major. The first system shows chords Am, F, Am, and F. The second system shows chords Am, F, D7, and F.

これも、D7が、key=Cの純粋なダイアトニックコードからは外れますが、
良くあるアレンジの一種なので、今は気にしなくてOKです。

と、このような感じで、インターバルから見て、
keyに対応したダイアトニックコードを当てはめていきます。

長くなってきたので、今回はここまでにしておきましょう。

この様な、keyに対するインターバルとダイアトニックコードの、
お互いの関係性を見ることが出来るようになると、楽曲の分析が凄まじく速くなります。

進行全体の把握から、耳コピー、転調、移調、と様々なスキルの基礎になるので、
じっくりとやっていきましょう。

特に最初は、インターバルの数字とコードを照らし合わせるのが難しかったり、
ローマ数字が見にくい(と言うかパッと見で判別しにくい)と思いますので、
徐々に目を慣らしていく感じで取り組んでください。

最後に、実は、今回例に挙げているコード進行のインターバルは、
とある曲が元ネタだったりします。

解説をしやすくする為に、原曲とは違い、このテキストではkey=Cに変えていますが、
その曲を知っている場合は、コードを弾いていたら何の曲かわかるかも知れません。

その辺りを含め、譜例3と共に、次回、解説していきたいと思います。

ありがとうございました。

大沼